九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

高麗陶器の生産と消費の研究

主税, 英徳

https://hdl.handle.net/2324/7182247

出版情報：Kyushu University, 2023, 博士（文学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

（様式３）

氏　　名　：主税　英徳

論 文 名　：高麗陶器の生産と消費の研究

区　　分　：乙

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、韓半島の中世陶器である高麗陶器の生産と消費の様相を検討し、中世東北アジア陶磁史におけるその特質を解明する研究である。高麗陶器研究は、高麗青磁に比べると決して十分であるとはいえない状況である。そのため、まずは、高麗陶器の器種分類や編年、器種構成の時間的変遷などの基礎的研究をおこなう。その上で、生産や消費の様相に関する時間的変遷を検討し、高麗青磁や高麗白磁などの動向と比較することで、高麗陶器の特質を明らかにすることが目的である。

上記の目的を達成するために、第１章では、韓国と日本における研究史を整理し、本論で解決すべき課題を提示した。そして、対象資料と方法を示すとともに、用語の整理をおこなった。

第２章では、まず、先行研究の成果を参考にしながら、器種分類をおこなった。次に、多種多様に及ぶ器種のうち、大型壺を対象として、時間的変遷に伴う型式変化を明らかにし、編年を構築した。大型壺は、頸部が長頸から短頸へと、波状文が施文されるものはその文様が、精密でかつ複数から、粗雑でかつ単数へと、時間的変遷に伴い連動した変化があることを示した。さらに、紀年銘資料や日本出土資料を含む年代把握ができる共伴資料などをもとに、大型壺の各型式における実年代を推定し、それをもとにⅠ～Ⅴ期を設定した。この大型壺編年が、次章以降における時期決定の基礎となっていく。加えて、朝鮮時代移行期の大型壺の様相について、泰安馬島４号船出土資料を対象に検討した。結果、Ⅴ期のものと朝鮮時代甕器にみられる「T字状口縁」をもつものが混在していることから、急激な変化ではなく、漸次的に変化していることを指摘した。大型壺とともに、日本出土資料に多くみられる盤口瓶・壺の編年についても検討し、時間的変遷に伴い口縁部側面の溝に関する製作技術に変化がみられることがわかった。また、泰安馬島１～３号船出土資料をもとにすると、他の器種に比べ盤口瓶・壺は、13 世紀頃に先行して全面施釉される器種の一つである可能性を示した。本章の最後に、器種構成の時期的変遷についても分析した。その結果、高麗陶器には、長期的に生産される器種、消滅する器種、新たなに生産される器種があることを明らかにした。

第３章では、生産様相を解明するために、地域別に窯構造を中心に分析した。分析の結果、

Ⅲ期にあたる 12 世紀において、窯後方部に新たな空間を設けた「排煙関連施設」が附設されることや、特定器種の生産に特化した窯が出現することを明らかにした。このようなことから、Ⅲ期が生産の画期である可能性を指摘した。このほか、排水溝の消長や暗渠状排水溝の有無などにより、高麗時代の楊広道・慶尚道・全羅道において地域差がみられる可能性があることや朝鮮時代甕器窯と比較した結果、高麗陶器窯構造と大きな差があることなどを示した。

第４章では、消費様相を解明するために、韓国出土の大型壺完形資料を対象に分析した。大型壺は、Ⅲ期以降になると、小型化する傾向がみられ、さらに埋葬に使用される例があることがわかった。このようなことから、消費においても、Ⅲ期に画期がある可能性を示した。

第５章では、消費様相に関するさらなる解明のため、日本出土の高麗陶器を対象とした。これまでの先行研究の成果をもとにしながら、分布や器種、時期などについて検討した。結果、分布は北部九州を中心としながら、点的ではあるが琉球列島までの出土が確認できること、器種は大型壺と盤口瓶・壺が主体であること、時期は、九州列島の流入でみるとⅢ期が最も多いことなどを明らかにした。

これまでの分析結果をふまえ、第６章では、生産と消費に関する時間的変遷をまとめ、第１～３段階を設定し、画期とその特質について考察した。高麗陶器の生産と消費からとらえることができる画期は、第２段階であることを示した。

第２段階は、生産において、新たな器種の出現や、排煙関連施設の附設、特定器種の生産に特化した窯の登場など大きな変化がみられる。その背景には、大型壺の消費・用途の拡大や日本出土資料の増加からみえる流通の拡大など、需要の高まりが認められ、消費においても大きな変化を把握できる。さらに、このような画期を、高麗青磁や白磁と比較することにより、高麗陶器の特質が鮮明になってくる。12 世紀前後に、高麗青磁は翡色青磁を完成させるとともに、窯も全国的に分布するなど活況をみせる。一方で、高麗白磁は生産量の減少や質の低下がみられ、下火になっていく時期にあたる。このようなか、高麗陶器は、用途や流通の拡大に伴う需要の高まりがみられ、それに応えるように新たな窯構造の導入や新器種の製作、地方窯の登場など、生産性の効率化を図っていった。このような高麗陶器の生産様相や消費様相における画期をもって、中世東北アジアにおける「中世的高麗陶器様式」の成立としてとらえたい。